

日記か物語かという問い

——和泉式部日記をめぐる——

はんざわかんいち

1

岡田貴憲『和泉式部日記』を越えて』（勉誠出版、二〇一五年）の「はじめに」は、次のように始まる。

▼『和泉式部日記』 和泉式部作。日記。一名『和泉式部物語』。

現在、一般に『和泉式部日記』の名で知られる文学作品は、右のように定義される。

この定義を、本書では次のように書き変える。

▽『和泉式部物語』 作者不詳。物語。一名『和泉式部日記』。

変更点は二つ。一つは、書名を「和泉式部日記」ではなく「和泉式部物語」とすること、もう一つは、作者を「和泉式部」ではなく「不詳」とすることである。

該著の帯文にも「日記ではない、物語なのだ」とあり、第一章の末尾では、以下のとおりに結論する。

この作品が伝本の表題として「日記」「物語」の両方を持つことはそれとして、現在のジャンル論の上では「物語」としての扱いを要求していることを、『和泉式部物語』における語り手の存在は雄弁に物語っているのである。

この結論に、なんら異論はない。むしろ当然すぎるくらいであり、とくに決着が付いていると思っていたのであるが、どうもそうではないらしい。問われるのは、日記か物語かという問題設定そのものである。

2

和泉式部日記の伝本は、三条西家本、寛元本、応永本、混成本の四系統に分けられ、そのうち三条西家本が最古・最善本とみなされている。そのため、三条西家本の表紙に記されている「和泉式部日記」が通称とされるが、他系統本はどれも「和泉式部物語」となっている。

「日記」であれ「物語」であれ、自らの名称を冠したタイトルを和泉式部自身が付けることはありえない。かりに自作であったとしても、後代の命名であろう。「和泉式部」に「日記」とも「物語」とも付されたのは、当該作品の捉え方の差違に他ならない。

とはいえ、ここで注意を促しておきたいのは、「物語」と対比される「日記」は、日記そのものではないということである。たとえば、古代物語の下位区分として、「作り物語」や「歌物語」、「歴史物語」があるように、「日記文学」という代わりに「日記物語」という名称でも用いられていたのなら、そもそも日記か物語かなどという、つまりない問いは生じようもなかった。

日記そのものが本来、中国から移入された、実用的あるいは公的な出来事の記録であったこと、改めて言うまでも

あるまい。それは、読み手としてはともかく、少なくとも書き手にとつて、文学とはまったく無縁の、というか、対極の用途・目的の文章である。「和泉式部日記」のように「日記」という語が付いているからといって、それがそのまま実用的な文章であるとは、誰も思わなかったはずである。にもかかわらず、なのである。

3

『新編日本古典文学全集26』の解説としてある「女流日記文学の条件と特色」（中野幸一）には、土左日記、蜻蛉日記、和泉式部日記、紫式部日記、更級日記、讃岐典侍日記の六作品について、日記文学の特性として、物語性・虚構性・記録性・紀行性・随想性・回想性・批評性・抒情性の七つを取り上げ、各作品に顕著に認められるものを示した一覧表がある。

それによれば、七つの特性のうち四つに当てはまるのが、土左日記と紫式部日記の二作品で、他の四作品は三つである。特性のほうから見ると、四作品に認められるのが記録性一つであり、三作品が物語性・紀行性・回想性・抒情性の四つ、二作品が虚構性と批評性の二つ、そして一作品のみが随想性である。作品としても、特性としても、すべてを満たすものは一つもない。

このうち、和泉式部日記の特性とみなされたのは、物語性と記録性と抒情性の三つである。物語性や抒情性というのは、物語との関係性を考えるうえで重要であろうし、日記との関わりからは記録性を取り立てられよう。このどちらの特性も和泉式部日記に顕著であるとすれば、日記と物語の双方の性質を兼ね備えた作品である、とはいえる。

当該解説には、これらの特性の認定基準を示していないが、本文に即すかぎり、おそらく物語性とみなされたのは叙述の視点、抒情性は歌の多出、そして記録性は暦日表現からではないかと推測される。

ここでは、叙述の視点に限って取り上げる。

当該解説では、和泉式部日記に物語性が顕著であることについて、「やはりこの作品が一貫して三人称的視点で叙述されているという点で、女流日記文学としては特異な存在である」と明記している。ところが、和泉式部日記に関しては、これまでまさにそれが妥当か否かがさかんに議論され、むしろ一人称的視点のほうが有力視されてきた。

その背景には、物語は三人称視点で書かれるのに対して、日記は一人称視点で書かれるという、抜き去りがたい思い込みがあったと考えられる。しかし、少なくとも近代文学以前において、物語が三人称視点であるのは認められるにしても、日記は決して一人称視点ではなかった。

実用的・公的な日記は、家記であっても、記録として出来事自体の精確かつ客観的な記述が求められるから、記録者が一人称主体として出るとは極力、避けられる。出来事を見る視点は記録者のものであり、それに限られるとしても、である。その基本はじつは今も変わらないのであって、個人的な日記とは訳が違う。

それでは、実用ではなく文学として日記がみなされるようになってからはどうか。

日記文学の創始は、紀貫之による土左日記である。そのあまりにも有名な冒頭の一文「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」に対する、従来の解釈に問題があることは、半沢幹一『土左日記表現摘記』（笠間書房、二〇二一年）の第一章で触れた。どの解釈も「女（である私も）」のように、「私」という一人称を補っているのである。その地の文において、一人称代名詞は一回も出て来ないにもかかわらず。

山口仲美『平安朝の言葉と文体』（風間書房、一九九八年）は、和泉式部日記を三人称視点とみなす立場を主張するものであるが、土左日記については、その冒頭文を、次のように論じる。

「するなり」の主語は、明示されていないが、一人称の「私」である。「私」は、以後の記述に視点を与える人物

である。つまり、「私」の目を通して事柄が語られる構図となっているということである。

明示されている主語として「女」という三人称があるにもかかわらず、明示されていない「私」を主語とする根拠は提示されていない。これも、日記は一人称視点であるという思い込みによるものではないか。

このような思い込みを助長しているのは、土左日記が紀貫之という男性によって書かれ、貫之自身も作中に第三者として登場することが周知されていたことである。かりに一人称視点だとしても、それは設定された女性の視点であって、実際の書き手の視点とはならないはずなのに、あくまでも仮託であるなら、実質的には貫之と同一の一人称視点として捉えられてきたのである。

もし女性による一人称視点で文字どおりであるならば、まさに虚構つまり物語になるが、そうはみなされないのは、日記が実際の書き手の一人称視点で書かれるという見方ゆえである。

5

和泉式部日記が一人称視点であるとする根拠は、和泉式部自身の作であることとみなすことにある。しかし、その内容に関する傍証はあっても、和泉式部が書いたとする証拠は見出せていない。そして、そのように捉える限り、文章表現としてさまざまな不都合・不統一がありながらも、和泉式部自身の一人称視点とみなすことが優勢だったのは、ひとえに和泉式部日記に求められたのが当事者自身しか知りえない真相だったからである。

為尊親王と敦道親王という皇太子兄弟と和泉式部との交渉は、スキャンダルな史実として、あまねく知られていたことである。その真相がどういふものであったかを知りたいと思う、当時の世の人々にとって、和泉式部日記は、その当人の手記・実録つまり体験事実の記録でなければならなかった。そして、和泉式部自身が書いたものとしてある

ならば、そこにどんな脚色（創作）が混じつていようと、読み手はその好奇心を満足させることができたのである。物語として読まれるようになったのは、後代、和泉式部が伝説となつてからであろう。

当時の一般的な状況から考えて、そもそも和泉式部が日々の日記を付けていたとは考えられない。宮との贈答歌や手習いなどの資料は手許に残っていたのかもしれない。和泉式部自身が書いたとすれば、弟宮亡き後に、それらの資料を参照しつつも、大方は記憶に頼つた回想によるものであろう。そして、その記憶は、和泉式部の中では、何があつたにせよ、すでにかけがえのない宮との物語として変容してたと考えられる。そこには、自己弁護や世の噂に対する釈明などの意図も十分に含まれていたに違いない。

つまり、和泉式部自作であつたとしても、それは本来の意味での日記では到底ありえず、和泉式部日記は、事實はふまえつつも、一つの物語として書かれたものである、ということに変わりはない。

6

そのように考えるならば、和泉式部日記における叙述の視点の問題に関して、一人称か否かを問うことはナンセンスである。これは、別人の作とみなしても、和泉式部に成り代わつて書いたとすれば、同様である。一見、日記のように見せかけても、物語なのであるから。

今「日記のように見せかけても」と述べたが、じつはそれさえも疑わしい。先に、日記文学の特性の一つとしての記録性は、和泉式部日記における暦日表現と関係があることを指摘したが、暦日を明示する表現は、約一〇カ月の期間にわたる記述の中で二三例、見られるにすぎず、しかも飛び飛びで、示し方もさまざまであるから、各日記事冒頭の暦日表示を原則とする日記に対して、それらしく見せかけようとした意図の痕跡とみなせるレベルには達していない。時系列に即した展開というのも、日記に限つたことではない。

記録性の認定において優先されたのはテキスト自体のありようではなく、それと史実的な記録との照応関係によるものであろう。和泉式部以外に、その特性が認められた土左日記、紫式部日記、讃岐典侍日記についてもまったく同様である。

7

和泉式部日記の叙述における視点が問題にされてきたのは、一人称視点であるとしても、それが非明示であり、かつ「女」という三人称も現われることにあった。それを整合させるために持ち出されたのが、「超越的視点」や「視点の融合」などという概念である。

一般に、主語の非明示は、人間関係が特定されるコミュニケーションにおいて、それが当事者の双方にとって自明だからである。日常会話ではそのほうが自然であり、逆に明示される場合には特別な意図があるとみなされる。

文章によるコミュニケーションの場合、当事者となるのは書き手と読み手であるが、読み手が想定されない私的な日記は、書き手自身をわざわざ一人称で示すことは不要であるし、公的な日記は、すでに述べたように、むしろ意図的に排除される。

それに対して、物語の場合は、書き手とは別人であることを前提とした「語り手」という存在が設定され、その聞き手との関係におけるコミュニケーションとなる。そのうえで、語り手は、語られる物語世界に直接関わることなく、語ることだけに制限されるのが原則である。

この原則に立ち、和泉式部日記を物語とみなす限り、その地の文における主語の非明示については、次の三点を押しさえておく必要がある。

第一に、読み手がこの作品を読む以前に、帥宮と和泉式部の関係を描いたものであるということを知っていること

を前提にして、書かれているということである。

第二に、その世界に登場するおもな人物は宮と女の二人であるが、その一方である宮のほうは明示されていることである。主語としては非明示であっても、その主体に対する敬語表現によってそれと知れる。

第三に、宮と女以外の人物も、場面ごとにそれが誰であるかが分かるように表現されているということである。

以上からは、和泉式部日記における主語の非明示が問題になるのは、こと女に關してのみであり、非明示であることによって逆に、その女であることが特定されるといえる。

8

和泉式部日記の冒頭文は、次のとおりである（本文は新編日本古典文学全集による）。

夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。

この中で、「嘆きわびつつ明かし暮らす」主体が誰かが、示されていない。なにせ冒頭であるから、この作品に対する予備知識が読み手になれば、当然、それが誰か不明なままに、とりあえず次へと読みを進めることになる。一種のサスペンス状態である。

しかし、この作品の読み手に予備知識がないと考えられない。かりにそういう読み手がいたとしても、主語が非明示なのは、それが一人称だからと思っただであらうか。

山口前掲書は、次のように述べる。

平安時代の物語作品を見れば、三人称であっても主語の明示されないことは、普通なのである。我々は、物語に対しては、まれに明示された三人称の主語から、他の文の主語もそれと推測して読んでいるわけである。

『和泉式部日記』も、「日記」という先入観をもって接すると、三人称「女」の語の出現が奇異に思える。しかし、当時の文章の実態を考慮すれば、物語と同じく明示されていない文の主語も全て三人称「女」と考えて何ら支障をきたさない。

「日記」という先入観「自体が成り立たないというのは、すでに述べた。したがって、それを根拠とする、主語が非明示なのは一人称だからというみなしも成り立ちようがない。

しかも、和泉式部日記の場合、他の物語作品のように「まれに明示された三人称の主語から、他の文の主語もそれと推測して読」まれたわけでもない。事前に、女であること、それが和泉式部であることが想定されていたのである。しかし、くどいようであるが、このような事前の想定が表現上の一人称を担保したわけでは決してない。あくまでも、それを物語として読む限り、三人称でしかありえないということである。

さらに言えば、物語であるならば、たとえ「我」という一人称主語が地の文に現われていたとしても、それは書き手とは別次元の、「我」と称する人物を登場させたということになる。

むしろ問題になるのは、あえて「女」と明示したほうであろう。

和泉式部日記において、「女」がはじめて現われるのは、冒頭文から一四文めにおいてである。

あやしき御車にておはしまして、「かくなむ」と言はせたまへれば、女いと便なき心地すれど、「なし」と聞こえさすべきにもあらず。

これまでの経緯からすれば、ここに「女」と示されなくても、誰が「いと使なき心地」をしたかは、明らかである。とすれば、この「女」には動作主体を示す以上の意図があったということである。その意図がはじめて男女関係を結ぶことになるのを予告するものであるのは、言うまでもない。そして、宮邸入り後に、「女」と記されなくなるのも、それ以前とは二人の關係自体が変質したからに他ならない。

9

和泉式部日記に関して、日記か物語かという問いが出されたのは、日記が一人称視点で書かれるものであるということ、そしてその一人称が和泉式部自身によるものであるということ、この二つの思い込みに端を発しているということ論じた。

和泉式部日記に関する注釈も研究もかなりの蓄積があるが、物語とする立場にあつてさえ、その思い込みに囚われてしまっているように思えてならない。いっぽう、「日記」であるとする立場には、その本来性とは無關係な意味付けをする論まで見られる。女が知りえない宮邸内の詳細が描かれているのはなぜかということ巡る議論も、この思い込みを離れてさえしまえば、何の問題にもならないはずである。

それが、物語の物語たるゆえんなのであつて、物語としての性質が問われることがあつたとしても、日記だからではない。このようなことは、あえて言挙げするまでもないことかもしれないが、もしそのせいで、今もなお堂々巡りのな議論が続いているとすれば、それこそ視点の転換こそが必要なのではあるまいか。

その了解に立つたうえでのことならば、この作品を「和泉式部日記」と称することに、何のさしさわりもないし、わざわざ変えるにも及ばない。